

## 第一章 屈辱の船出

昭和六一年七月から昭和六二年六月までのできごと  
新チーム構成メンバー

二年生	一年生	六二年四月以降の新入生
マネージャー内 田（長与中）	マネ 三木（丸尾中）	マネ なし
選手 主将 森保（深堀中）	選手 月川（横尾中）	選手 岡（富江中）
選手 清水（長与中）	選手 又村（横尾中）	選手 浜口（深堀中）
選手 秋田（桜馬場中）	選手 山道（旭中）	選手 永井（佐々中）
選手 松井（時津中）	選手 竹下（西泊中）	選手 徳永（岩屋中）
選手 峰（三和中）	選手 小森田（清水中）	選手 田川（桜馬場中）
選手 小久保（三和中）	選手 田中（長与中）	

### よもやの初戦敗退

昭和六一年六月八日。

またひとつ、生涯忘れることのできないできごとが増えた。しかも、屈辱的なできごととして。

その日は県高校総体の二日目であった。

第一シードの鶴鳴は、一日目が不戦勝でこの日から登場。

その初戦で鶴鳴はノーシードの大村高校に負けた。

初戦のもたつきというのはよくある。この日の鶴鳴もそうだった。つまらないパスミスは出る。ファウルはするで、私も少しいらいらしていた。しかし、勝ち負けに対する危機感はまったくなかった。周囲から見ていると、鶴鳴が相手のゾーンを攻めあぐんでいるかのように見えたかもしれないけれども、私自身それが気になってはいなかった。というのは、二ヶ月前に行なわれた春の選手権で純心高校のゾーンを攻め切って優勝していたからである。私が自信を持っていた理由は他にもあった。

私が腎臓を悪くして入院した昭和五四年以来、細々と食いつないではいるもののリクルートはうまくいかず、年々チーム力が低下しているのは誰が見てもわかる。したがって、新人戦あたりではベストエイトぐらいに食いさがり、それから少しずつ強くなって、高校総体では奇策を折りませて何とか優勝するというのがこのところの鶴鳴のパターンだった。それが、今年はひとつ前の春季選手権で優勝してしまったのである。

確かにこのところずっと優勝するよつなメンバーは揃っていないかった。しかし、「最後には何とかしてやる」と思ってたやっていたし、大逆転を二年も続けると周囲でもそう思い始める。「最後は結局鶴鳴だからねえ」と、そんな周囲の声が私の耳にも聞こえてきた。

面と向かって言われると、「いえいえ」と言っただけで否定してはいたものの内心悪い気はしなかった。というより、態度では否定しているものの自分でも「よくやるなあ」と思っていた。それがうぬぼれだった。

熊谷や川合達のように素質に恵まれ、ビッグゲームをたくさん経験した選手と違い、ひとりひとりが危なっかしくて頼りない連中をつぎはぎだらけで創りあげていることは忘れてしまい、単純に「今年は春に追いついたんだから、夏にはもっと差がつくさ」と思い込んでしまっていたのである。

所詮、私にコントロールされて育ってきた選手達である。春にうまく攻めたから夏にはもつとうまくなるという単純な公式の当てはまる選手達ではなかった。四月以来、こまかい詰めをしていなかったことに気がついた時はもう手遅れ。対応にもたついた彼女達の頭がパニックに陥るのに時間はかからなかった。

## 始動

シヨックだった。

初戦で負けたこともシヨックだったが、それより自分の選手に対して錯覚を起こしていたことの方がもつとシヨックだった。しかし、城主がシヨックに打ちひしがれているわけにはいかない。翌日からさつそく次年度に向けてのチームづくりに取りかかった。

練習はいきなり五対五のスクリメージで始まった。その練習の中で私の頭の中を独占していたのは松井と月川の扱いをどうするかということだった。このふたりは私の考えの中でのポイントガード候補であつた。とにかくポイントガードを創らないことには落ち着かないのだ。

はじめの構想では松井をポイントガードにするつもりだった。松井の方が月川よりもプレイに切れがあつたからだつた。しかし、スクリメージを重ねるにつれ、やっぱり月川をポイントガードにしたくなつた。やっぱりというのは、彼女の目がいいのに惚れて前々からポイントガード候補として見ていたからである。しかし、すんなりと月川をポイントガードに決めてしまつには少し不安があつた。それは彼女の精神面の問題だつた。

彼女は春季戦を過ぎたあたりから、中学時代に交通事故で打つた腰がまた痛くなつたとかで約二ヶ月ほどハードな練習から遠ざかつていた。私はそれを、腰痛の再発というより五月病と見ていた。本人に聞いたわけではないから私の一方的な思い込みだつたかもしれないが、そういう匂いをする選手をすんなりポイントガードにするには抵抗があつたのである。

しかし、練習が終わつた時、私の気持ちは月川をポイントガードにすることに決まっていた。やっぱり彼女の目はいい。だが、月川の精神面に不満があつた私は、「おまえをポイントガードにするけれども、それはおまえの技術を買つのであつておまえの人間性を信頼しているからではないよ」と、一言余分ないやみを言つた。それが私の悪いクセと知りつつ…。

## スリーポイント

ポイントガードが決まつた。次は攻撃のシステムだ。翌年は純心と長崎北に得点力のあるセンターがいるので、とてもインサイドでの勝負はできない。するともう、残っていることは徹底的にスリーポイントを武器にすることしかない。そうなるとメンバーの選び方が問題になる。

スリーポイントが打てる選手は三人。松井・森保・清水の二年生である。ポイントガードと決めた月川はスタメン決定なのだからその候補の中に入って欲しいのだが、まだ力がなく、シュートの距離を出せるまでには時間がかかる。そのほかにローテーションに組み入れられる選手は二年生の秋田と峰、それに一年生の山道である。シューター候補は皆一五〇センチ台、秋田と峰が一七二センチ、山道は一六七センチ。小兵群団である。

スリーポイントを攻撃の武器にしてやるのならどうしても三人のシューターが必要だ。だからといってセンターなしで試合ができるわけではない。そこでとりあえず 月川 松井 峰 山道 秋田

のスタメンで、三年生に相手をしてもらって一〇分ずつのスクリーンを何度もやった。どうしてもひっかかったのが山道だった。外でも中でも半端なのである。

こうして、あれこれメンバーを変えてみてはまた挑戦という日々が続いた。

「今回、実にぶざまな負け方をしたが、俺がもういちど鶴鳴を全国のトップレベルに引き上げたいと思っている気持ちはいさかも衰えてはいない。それに加えてみんなにひとつ頼みたいことがある。それは月川をデビューさせることだ。そのことに力を貸してほしい。中学時代の月川のライバルがそれぞれ他の高校でやっている。そしてやはり、一年生ながらスタメンで出てくるだろう。月川をその連中に負けさせたくないんだ。チームのことも大切だ。しかし、あいつのためにひと肌脱いでやろうという気持ちもつそれと同じくらい大切なことだと俺は思っている」

チームの方針が一応決まったところで、私はみんなを集めてそんな演説をした。負け惜しみめいたセリフだがそれは本音だった。

「鶴鳴に行った月川が一番伸びたね」

バスケットの関係者達にそう言わせたい意地があったし、何かはつきりした目標を持って取り組むことが負けたあとのショックから立ち直るエネルギーを生み出すような気もした。

## メンタルリハーサル

「あいつはセンスがない」というセリフは今までに何度もいろんな指導者から聞いたし、私自身毎年そんな選手を抱えてもてあます。今年もそうだ。センスがないからしかたがないのか、センスは磨けばなんとかなるのか、私はずっとそれを考え続けたあげく、磨けばなんとかなるという訓練の仕方を捜すことにした。その糸口は、人間の情報収集能力について考えをしばってみることだった。

人の行動はその人が得た情報の内容によって決まる。人が情報を得る方法はふたつ。ひとつは目で見た情報であり、もうひとつは耳で聞いた情報である。そのほかに、触れてみるとか匂いを嗅ぐという方法があるがそれらは特殊な状況下でのことだから省く。

さて、センスのない選手の情報収集の方法と収集した情報の処理の仕方をじつと観察してみると、共通して聴覚優先型だからセンスがないのではないかというひとつの考えに到達した。聴覚優先型とは、耳からの情報即ち『ことば』としての情報はしっかり聞き取るけれども、それを頭の中でイメージできないタイプのことである。

聴覚優先型は『ことば』や『文字』の情報には強い。言い換えれば、限定された条件のもとで選択をさせられるようなペーパーテストには強いのである。ところが、このようなタイプは目で見た景色から、次に起こるであろうと予想される答えを『ことば』や『文字』としてではなく、実際の動きや景色のイメージとして答を出すことが苦手なのである。

私はこのような選手を聴覚優先型に切り換えていく訓練をすること、説明された『ことば』を『ことば』として脳に収めるのではなく、『絵』として脳に収める訓練をすることが重要なことではなからうかと考えた。

そこで取り入れたのがメンタルリハーサルである

ひとつのメニューが終わると給水休息がある。時間は三分。水を飲むのは一分ぐらいで済む。残りの二分をイメージする時間に使うのである。

イメージの内容は、さきほどの練習で成功した場面をもういちど脳のブラウン管に映し出してリプレ

イしてもいいし、これからやるメニューの内容を想像の世界で映し出してもいい。試合の時はそれをハーフタイムにやる。ただ、やる時に肝心なのは、映像の中に登場させる自分は常に成功している自分であり、カッコいい自分にするのだ。

「この、メンタルリハーサルをつまぐことができるようにするには前もって訓練しておかなければならないことがある。それは、集中する訓練である。新生入に何かを教えようとすると、全ての選手を例外なく集中する訓練から始めなければならない。」

たとえば今、ある選手のシユートフォームを矯正しているとする。

「ほら、そういうふうには肘を張るからいけないんだよ」と、私が言う。

「ハイ」と返事して選手はもういちどシユートを打つ。

ところがその選手はボールの行方ばかりが気になって、肝心の肘には少しも注意を払ってはいない。

「肘って言っただろ！」

「ハイ」と言って、今度は肘をチラチラ見ながらシユートする。

肘を見なくても肘に意識を集中させることができなければならない。それができないのである。どんなに素質のある選手でも、最初からこれをきちんとできた選手はいない。

選手を集めて私は時々やる。

「自然にリラックスして立って、私が言うとおりにするんだぞ。右の足の親指の爪に全神経を集める」  
「……………」

「次は、左の肩」

「次は、右手を高々と挙げて人差し指の指先……………」

という具合に、どこかに自分の『気』を集める訓練をするのである。先程のシユートフォームの矯正のように、目で実物を見なければ自分の肘がどうなっているのかわからない選手を、目ではボールとボールを見ながら『気』は肘に集中して、イメージの世界で自分の肘の格好がどうなっているかを描ける選手にしなければならぬのである。

森保はすごい選手だった。

目にも止まらぬ速さでドライブインする。フルスピードでドリブルしてきて、ピタッとジャンプして男性なみの安定したジャンプショットを打つ。ところが彼女はしばしば信じられないプレイをした。誰が考えても今すぐパスすればいいという時にいつまでもボールを持っていて一生懸命自分で何かをやるうとする。まだ早いと思う時にパスして敵に取られる。選手を集めて説明をする。図解して示す。「しっかりやれよ」と言ってコートに送り出す。ところが森保は、今説明したばかりなのにまったく違うことをやってしまう。そんなことが一日に何度もあった。森保は説明を熱心に聞かないようないかげんな選手ではない。

森保は一生懸命私の説明を聞く。そして、「よし、見事にやってやるぞ」と自分に言い聞かせる。そんな選手なのである。ただ、残念ながら「やるぞ」と心で誓って脳のブラウン管に描き出したプレイのイメージが私のブラウン管とかなり食い違っている。おまけに、一生懸命なるが故に思い込みが強く、それがまた彼女をとんでもない方向に引きずっていくのである。

私が、選手のセンスを『視覚型』『聴覚型』に分けて考えるようになったのは、この森保がきっかけである。他に、山道もひどかったし秋田も峰も似たりよったりだった。泣いても笑ってもそれだけしかないメンバーだからセンスが悪いのなんのと言ってられない。その問題を解決しなければ先に進まない。そこで前述のように考え、情報をイメージ化する訓練を試みてみたのである。しかし、卒業するま

でこの四人のバスケットセンスは改善されなかった。これは、本人たちがメンタルリハーサルを熱心に行なわなかったからなのか、私の着眼点に誤りがあったからなのかよくわからない。

後に、選手のイメージ能力を開発することについては『ぶん文庫も読み、さまざまな方法を試みた。中でも我ながらおもしろいなと思ったのは、ことばで説明したプレイを選手に図解させるという試みである。例えば、「ハイポストにフラッシュしてきた選手にパスを入れ、バックドアーでシュートに持ち込む」という説明を選手に図解させるのである。そのプレイを実行するための選手の配置などまったく説明しない。それも含めて図解させるのである。優秀な選手はもちろんきちんと描ける。少しわかる選手はバックドアープレイそのものは描けるが、他の選手の配置がバックドアープレイをするにはじまになる位置に居るということに気付かない。まったくイメージ能力のない選手は何も描けない。

この方法は、寮生が増えてきた平成九年以降、パートナーを組ませて一方が出題者になり、一方が回答者になるという形式で寮生同志任意の時間に行わせることにした。しかし、画期的なアイデアと言えるほどの成果は二〇〇〇年の五月現在まで得られていない。

今は（二〇〇〇年五月）この問題は選手の脳の問題に由来する場合と学習経験の回数に由来する場合とのふたつに大別されるのではないか思っている。脳に由来するとは、自己制御を司る前頭葉、理性を司る左脳、感性を司る右脳の関係のことである。これは人によって違う。その違いは必ずスポーツや音楽や絵画等に挑戦した時、できればの差なって表れるはずである。

学習経験の回数に由来するとは、その現象を、「なるほど」を見つかるんだという明確な意図を持って何回見たか、何回体験したかということである。その差の回数の差は必ず結果の差につながるはずである。

## ボビー・ナイト

八・九・一〇月とチームは順調に伸びた。

伸びたといっても駒が駒だけに純心を倒すには程遠い。程遠いけれども自分の意図するところがおぼろげながら見えてきたので、高校総体シヨックはかなり薄れていた。一〇月末に行なわれた長崎地区新人戦ではやはり純心に大差で負けたが、見ていた人達は「今度のチームは今までと少し毛色が違うね。おもしろいよ」と言ってくれた。

スクリーンやピックをたくさん使ってシュートチャンスを作っていたっそれまでのパターンオフエンスががらりと変わって個人個人の攻撃チャンスが最優先にし、破り 合わせが主体となったオフエンスになったのである。勝てはしないけれども、他のチームより一歩先を進んでいるような気がして元気が出た。

・ゾーンオフエンスもマンツーマンオフエンスも、まず第一に大切なことはスペイシングである。

スペイシングとは選手の配置のこと。

・ボールも人も動きは人の多い方から少ない方へ。これがオフエンスの組み立ての大原則である。

動きの原則はフレックスからヒントを得た。スペイシングについては前々から『トライアングル』とすることばで選手にやらせていたものにボビー・ナイトのモーションオフエンスデモンストレーションビデオから学んだことをつけ加えた。

トライアングルというのは、ボールを持った選手とゴールを結ぶ線を境界にして、左右対照の位置にプレイする場所もしくは人が必ず存在すること、という意味である。誰もがそのことを意識してプレイ

していればゾーンであろうがマンツーマンであろうが攻めあぐむことはないとした。

さて、ボビー・ナイトについて少し語らなければならない。

この数年間、私はモーシヨオフェンスについて非常に興味をもっていた。それは、パターンオフエンスはどんなに精巧に組み立てても、所詮選手はコーチが組み立てたベルトコンベアーに乗せられて移動しているだけで自主性はないと思っていたからである。

しかし、いざモーシヨオフェンスに取り組んでみると、「おまえたちで勝手にやれ」というのとモーシヨオフェンスとの区別がつかなくなってしまう、また元のパターンオフエンスに戻る。そんなことの繰り返しで三年ぐらいが過ぎた。そんな中で、今まで何度も何度も見たボビー・ナイトのモーシヨオフェンスデモンストレーションビデオが今年になってぼんやり見えてきたのである。

まずスパイシングがよいこと。

基本的な動きの約束を整理すること。

目を養うこと。

以上がモーシヨオフェンスの基本原則であると私は結論づけた。

三つ目の『目を養うこと』は、モーシヨオフェンスのビデオではない、別のビデオでボビー・ナイトが盛んに強調していたことばだったが、私はこれが気に入った。彼は再三「選手達はコートの中のプレイを見ているけれども、実は何見えていない」ということばOK SEE ということばを使って強調していた。これは、私が選手のセンスについての考え方で自分なりの答えを出した時期とほぼ同時だったので、何か自分がボビー・ナイトと肩を並べたような気分になって嬉しくなった。

何かひとつのことを考えているとそれから派生しているんな考えが浮かぶものだ。私は、ボールラインについてもある日突然疑問がうかんだ。

ボールラインというのは、実際に線は引いてないが、ボールを持っているプレイヤーからベースラインに平行に引いた仮装線のことを言う。従来、ディフェンスをする時に、相手がボールラインより下にいたらクローズドスタンスでディナイアルディフェンス、相手がボールラインより上にいたらオープンスタンスでヘルプディフェンスという考え方が主流だった。

それは、ボールラインが下がるということは、よりゴールに接近されることだから厳しく外に追い出せ。ボールラインが上がるということは、ゴールから遠ざかるということだから、中に入ってこられないように防ぐだけでよいという考え方に由来する。したがって通常、フォワードポジションで相手がボールを持っている場合、ベースライン側にいるプレイヤーにはディナイアルディフェンスで守り、上方のガードポジションにいるプレイヤーにはヘルプディフェンスをする。

ところが、ボールラインはベースラインと平行ではなく、ゴールを中心とした同心円上にあるとしたらまったく違ってくる。前二者はどちらもディナイアルディフェンスでなければならぬ。ゴールに近いかが遠いかはゴールからの距離によって決まるのであって、ベースラインからの距離で決まるのではない。私はそう考えたのである。

## 急転直下

十一月の二日と三日、となりの佐賀県伊万里市で行なわれた近県対抗試合に招待された。福岡・佐賀・長崎から数チームが集って試合をした。超一流のチームは参加しなかったけれど、決勝戦は一点差で勝って優勝した。いや、優勝したことよりも試合内容が小気味よかった。アウトサイドプレイ・ポストプレイ・ドライブのタイミングが実にうまく行き、私も選手達もスッキリした気分になった。翌四日の

練習は、明らかにみんな張りきっていた。動きに張りがある。私自身もとても充実した気分でコートに立っていた。しかし、練習が終わる直前にアクシデントが起きた。

練習の最後のメニューのフットワークをやっている途中、松井が右足先が床にひつかかってドテツと倒れた。みんな気付かなかっただろうが、私は直感的に「まずい！」と思った。ころんだ格好が気に入らなかったのである。本人もケロッとしているが、私はすぐコートの外に出し、練習を中止させた。「ひよつとしたら前十字靭帯をやったかもしれない」私はそう思った。

さらに2日後、今度は清水だ。ディフェンスはダメーにして、オフェンスの動きの確認練習をしていた。軽い練習だ。清水は私の目の前でウーツと唸って右膝を抱え込んで倒れた。ガードからのパスを左サイドのフォワードポジションで受けようとしてボールにミートした瞬間だった。なんでもない軽い動きだった。急なストップ・膝の屈曲・捻り、動きこそ激しくなかったがその三条件が揃っている典型的な前十字靭帯損傷のパターンである。ケガ人が出た時はいつもそうであるが、ケガした選手よりも私の表情や態度の方に他の選手達の視線がサツと集る。「どの程度だろうか？」選手達は私の表情から探ろうとするのである。

「そのままじつとしてろー！」平静を装い、清水の痛みが少し和らぐまでそのままじつとさせておく。その間に氷を用意させ、二三人の世話をさせる選手以外にはその後のメニューを指示をする。痛みが和らいだところで清水を隅に移動させ氷で冷やす。松井に続いて清水まで、連続して主力選手のアクシデントだ。しかも、清水は翌年の高校総体にやっとなに合つかどうかというところだろう。続く練習を目で追いながら私の頭の中では次の構想がグルグルかけ巡っていた。

松井はやはり前十字靭帯損傷だったが、断裂までには至っていない。しかし、復帰までに約二ヶ月はかかるだろう。清水は医師にあらかじめ連絡しておき、関節鏡を入れる日を決めていた。その日私は、関節鏡を入れた清水の膝をテレビのモニターで見せてもらった。白衣・マスクをさせられた私はモニター画面に見入る。医師が「ホラ」と言って、金具で清水の膝の前十字靭帯をしゃくる。清水の前十字靭帯はゆらりと揺れた。そしてそれは完全にちぎれていた。ちぎれた端っこがゆらゆらしているのを見て私はインギンチャクを思いだした。

おまけに清水は半月板も裂けていた。金具でしゃくられた清水の半月板は中央がパッキリ裂けていて、典型的なバケツ柄状断裂だった。清水の半月板は三ヶ月形ではなく丸い形をしていた。いわゆるディスクコイドといわれるタイプだ。このタイプは欧米人に比べて日本人には多いそうであるが、丸形は当然安定が悪い。清水は遅かれ早かれ膝を痛める運命にあったのである。それにしても、神様はいじわるだ。

「張り切り過ぎた」私はそう思った。  
伊万里から帰った後、練習が激しくなったわけではない。二人がケガした場面も激しくはなかった。あるとするならば、選手の張り切り過ぎていている気持ちと身体的にはまだ未完成であるはずだがこのアクシデントを生んだとしか考えられない。

ともかく、残った選手で再編成だ。もう考える余地はない。スタメンは、森保・秋田・峰の二年生三人と、月川・山道の一年生ふたりで組むしかない。山道はアウトサイドができないので、身長は一六六センチしかないがフォワードセンターに。そして、一七二センチの峰をフォワードにコンバートした。峰にはジャンプショットのみならずスリーポイントも打てるように、それこそ突貫工事でスリーポイントシュートの要領をたたき込んだ。

次の週の土・日・月が県の新人戦。もう何も考える暇もない。峰にも山道にも、思い切つてやれと言っしかなかった。結果は二位だった。しかし、長崎北が純心と準決勝で当たったための二位であって、力の差は大差の二位である。ランクをつければ三位ということか。それは、二ヶ月後の九州春季大会

県予選で証明された。準決勝で長崎北と当たって敗れたために鶴鳴は三位。九州大会には出場できず、それからずるずると頭打ち状態が続いた。

## フルマラソン

三年生の小島は純朴でまじめな選手だった。明るくて、冗談が好きで、感性が鋭かった。他の選手がダメだったというわけではないが、小島のまじめさは周囲の者の心を動かした。高校総体が終わってしばらくして実業団入りが決まった。進路が決定したら、小島に限らずみんな卒業式前日まで後輩の練習に参加してくれるが、小島の取り組み方は格別だった。後輩の指導をしながら、気持ちが高じて涙声になってしまったことがしばしばあった。

「さっきも言ったのよ。もう、何回言えば……」  
あとは涙で声にならない。

小島の目は鋭かった。たとえば、ある選手が私が指摘したことに気付かずにプレイしていると。私がムツとした時はもう小島が現場にすっとんでいるのである。私の目の色を伺って行動しているのではない。自らの感覚から発する行動なのである。小島の脳細胞には、私が今のチームをどのように創ろうとしているか、そのためにはどの選手が中心となるか、それぞれの選手にどのような長所があり短所があるか、すべてインプットされていた。

三年前の大神もそうだった。後輩の練習を見ていて目がすわっている。そんな時に話かけても聞かない。それほど集中して後輩の練習を見ていた。こんな選手が毎年いるわけではないが、そんな選手と出会った時はコーチ妙利に尽きる。

さて、私はそんな小島の働きぶりを見るにつけ「こんな選手がいるのに負けさせてしまつて……」という後悔の念が日増しにつのつていった。ある日私は小島に言った。

「このまんま卒業するのは悔いが残るね。何か、青春の証しを刻んで卒業したいね」

問題をすり替えているようだが、私は小島とともに「がんばったなあ」という何かを残したかった。

「フルマラソンに挑戦しようか！」

「エーッ、四二キロでしょー」

小島は驚いてみせたが、目には「やってみたいな」と書いてあった。フルマラソンといっても正式なレースに出場するのではない。普通の道路を走ってみようというわけである。

バイクで距離を計ってみた。学校を出て北へ走れば西彼杵郡琴海町の村松小学校で折り返すと四二キロになる。南に向かって走れば野母崎町の高浜という所の黒浜というバス停を折り返せば同じ距離だ。

私達は南のコースをとることにした。北のコースは交通量が多くて走りにくいのだ。それにしても、バイクで走ってみて初めてわかったことだが四二キロは長い。今まで、テレビの画面でランナーが走るのしか見たことがなかったが、こうして自分が走るコースを実際にバイクで走ってみたら気が遠くなるようだった。決行は二月二十八日。卒業式の前日と決めた。

いきなりフルマラソンに挑戦するのは危険なので、三〇キロのコースを三回走って長い距離にからだを慣らした。一回目は百円づつ持って走った。水分補給のために自動販売機から清涼飲料水を買った。十五キロの地点で水分補給をしたが、甘みがついているものはダメだとわかった。ただの水がいい。甘みがついているものは胃に残り、胸やけがして苦しい。二回目はガソリンスタンドの水道で水を飲ませてもらうことにした。

それまで、ロードワークは日課みたいなもので、走ることに慣れていたが、長い距離を走ったとし



てもせいぜい十五キロぐらいのものである。だから給水も必要ないし淡々と走るだけだった。ところが、これだけの距離になると給水だけでなくいるんことが起こる。まず、両足の親指のつけねに大きなマメができた。帰りついてからみると五百円玉ぐらいの水ぶくれだった。マメは底敷きのカドが当たってできたものとわかった。それで、底敷きの当たる部分をカッターで滑らかに削った。

二回目。途中で腹が痛くなった。この時は途中のパチンコ店でトイレを借りた。こうしているんなことを体験しながら迎えた本番。その日は猛烈に寒かった。二五キロを過ぎたあたりで私は並んで走る小島に言った。

「俺、ダメかもしれない。おまえ先に行け」

その少し前からふとももがピクピクし始めていたのである。二五キロを過ぎたあたりから、それがふともものうしろにも波及してきた。三〇キロのコースを練習で走った時は、マメができたくらいで身体の異常は何もなかった。むしろ余裕を持って走ったくらいである。なのに、今は二五キロでももう危なくなっている。なんとかがんばって走ったが、それから三キロぐらい走ったところで私の足は完全に板のようになって走れなくなった。もう歩くことさえできない。立っていたらふとももの前がけいれんするし、しゃがめばふともものうしろがけいれんした。私は中腰のまま、どうにもならない痛みをじっとこらえながら、そばの石垣によりかかって立っていた。

しばらくすると車が迎えに来た。もしも何かが起こったら拾ってもらおうと思い、家内に頼んでおいたのである。私達が発射して一時間くらいしたら、同じコースを南に向かって走ってきてくれと家内には頼んでおいた。頼んだ時、私の頭には小島が途中でダウンして拾われる図しかなかった。しかし、拾われたのは私だった。車に拾われてからしばらく走ると小島は顔真っ赤にして走っていた。かなりフラフラしている。「ガンバレ」その声をかけながら先まわりして様子をうかがった。

小島は遂に完走した。三時間二十八分。ゴールインした小島の顔には汗が蒸発して残った塩がこびりついていた。感動した。よく走ったなあと思った。小島に缶ジュースを差し出しながら、いたわってやりたい気持ちと侵すことのできない尊厳と、自分が完走できなかった悔しさとが入り交じっていた。

レストランで夕食を食べながら私は言った。

「明日はほとんどの高校が卒業式。全国で何万の生徒が卒業するのか知らないけれど、高校生として最後の一日を最も幸せに過しているのはおまえかもしれないね」

「ええ、きつとそうですよ」

何のためらいもなく、目を輝かしてそう答えてくれた小島を見て、私は少しホッとした。

後日談がある。

このままでは小島に濟まないと思ったから、後日体調を整えて私はひとり再び同じコースに挑戦した。しかし、この時も同じ二八キロ地点でリタイヤした。今度は足のけいれんではなく、血糖値の低下でスタミナがなくなっただのである。高校総体で勝たせてやれなかったただでなく、自分から誘ったマラソンでも借りができてしまった。

## 固執

リクルートは三年前まではほとんど互角であったが、この二一三年完全に逆転されて純心高校に差をつけられている。七年前、全国選抜大会で二位になった頃は福岡や大分からの選手もいた。が、今は県外からはひとりもない。というより、敢えて私が県外には出向かなかった。

私の入院を境にしてチーム力は低下し、それとともにリクルートは年々苦しくなっていく。リクルートが苦しくなるとまたチーム力は低下する。そんな悪循環がこのところのパターンであった。

苦しいけれども、今がまんでせずに県外に目を向ければ県内の指導者からソツポ向かれる。そう思っ  
て県外にはリクルートに出かけなかった。もっとも、出かけたところで、落ち目の鶴鳴には誰も来てく  
れはしなかったらうけど。

「おまえ、そんなきれいごとをやったってチームは強くないよ。もっと強引にやらなきゃ」  
そう忠告してくれる人がいた。その人の目には、私が過去の栄光にあぐらをかいていて「なーに、その  
うち来るさ」と、たかをくくっているか、私のバスケットへの情熱が冷めてきたか、どちらかに見えた  
のかも知れない。そのどちらでもなかった。

「まず県内からだ。地元の選手を大切にしないで、よそからもらって勝ったところで誰も喜んでくれ  
ない」そう思っ、県内の主だったところはほとんどかけずり回った。皮肉なもので、落ち目になると  
私をひいきにしてくれる指導者のところにはいい選手が出ない。他の中学にいい選手が出て来ても  
らえない。つまらないことに固執している、と言われるかもしれないけれど、それがもう八年も続い  
ていた。

翌年のリクルートは三人決まった。もちろん、県内のトップランクではない。長崎市内からひとり、  
佐世保からひとり、五島からひとり。そのうち、長崎市内の深堀中から来る浜口は一七五センチで熊谷  
以来の久々の大型選手だった。大型といってもただ大きいだけで、新人のお披露目の春季戦では「あれ  
どこから連れてきたの？」と、同じ長崎市内の指導者達から聞かれたくらいである。中学時代にバスケ  
ットをやっていた公式戦にも出場しているのにそう言われるくらいだから、確かに素質はない。だが、  
一七五センチを越える選手は熊谷以来だから、なんとか育ててみんなに注目させたかった。

入学してきた時の浜口は、一七五センチ八三キロ。なにはさておき脂肪を削らなければならない。私  
は練習することよりもまずダイエットを彼女に命じた。彼女はそれを守った。毎日が空腹感・脱力感と  
の闘いで練習どころではない。はじめの一ヶ月間は、練習の途中でフラフラになって倒れそうになり、  
脇に連れ出される日々が続いた。「倒れるなっ！立ってるよ！」今にも倒れ込みそうになる浜口に向か  
って私の声が飛ぶ。

経験のある人はわかると思うが、血糖値が下がってバテた時は立っていることさえ耐えられなくなり、  
からだがしびれ、どこでもいいから今すぐ寝るところがってしまいたいと思う。もうその時は恥も外聞も  
ない。浜口はそれが毎日続いた。私の命令で寝るところがるわけにはいかないから、脇にはずされて立っ  
てはいるが、壁によりかかって立ったまま眠り、時々膝がガクツとなつてハツと我に返る。

理屈を言えば、浜口の体内からエネルギー源が枯渇してしまつたわけだから、立たせているより寝せ  
た方が回復することはわかっている。もちろん、訓練を積み重ねた三年生がそうだったのなら直ちに寝  
せる。浜口は自分自身を追い込んだ経験などない。身体的限界より、精神的限界で参ってしまうレベル  
である。私は浜口に『耐える』ということ覚えさせたかった。

浜口はそうして、夏休みまでに八キロの減量に成功した。もうその頃の練習は最後までついてこれる  
ようになっていた。だがダイエットはさらに続く。一〇月には七二キロまで落ちた。これは、骨格の太  
い彼女にしてみれば理想の体重だった。ところが、それからしばらく経って、食事は元に戻したはずな  
のに元気がない。聞いてみると、トマトやリンゴなど、水分が多くてカロリーの少ない食べ物しかのど  
に通らないと彼女は言う。再び太るのが怖いのと食が細くなった習慣がついたのとでそんな食事になっ  
てしまっていたのである。

「バカヤロウ！何のためにダイエットしたんだよ！おまえの美容のためじゃないぞ！」

私はほんとに腹が立った。と同時に、今度は拒食症になるのではないかと心配した。今度は食べさせる方の心配である。「今日は何食べた?」「どれくらい食べた?」と毎日聞く。しかし、それも秋にはもう心配要らなくなっていた。こうして、浜口がスポーツ選手らしい身体つきと顔つきになるのに半年かかった。

## 頭打ち

一月三〇日。

松井が復帰した。

私は松井・月川・森保・峰・秋田のスタメン宣言をした。しかし、松井のスリーポイント確率はがた落ちだ。ケガをした膝が気になることと、体力が充分回復していないことと、スタメンの重圧に責められている毎日なのだろう。

二次予選で長崎北に負け、二月の九州大会には出られないから次は四月の春季選手権と六月の高校総体しか残っていない。もし、清水が復帰してきて少し心強くなったとしても、今このメンバーである程度のメドをつけておかなければならない。ところが、そのメドが一向に立たないのである。ある日の練習中こんなことがあった。みんなを集めて私が説明する。ていねいに。図解説明も加えて、「さあ、しっかりやれ」

ところが、始まったとたん、私が説明したこととまったく違うことを、なんのためらいもなくやった選手がいた。また森保だった。

「バカ!」 あとは「とばにならない。森保を睨みつける」と三〇秒あまり。

「帰れ」

森保を追い返してしまった。

万事がこの調子なのだ。見る、聴くができないのである。これが、一月からずっと続いている。もうひと月以上だ。私は能力の限界というものについて真剣に考えるようになっていた。能力のない者に要求をし続けるとパニックになってますます力が発揮できなくなる。もう、一人ひとりの特徴ははっきりしていた。森保・清水・山道は目の前の現象から読み取ることができないタイプである。松井と月川は少し違っていて、読めるけれども思い切り表現することができないタイプだ。峰は、自分が読めていないし判っていないことが気にならないタイプ。秋田は臆病で、自分に何が起ころうとするとすぐパニックになる選手だった。

訓練を重ねていくと個人の能力は開発されていく。それは身体的な能力だけでなく、精神的な能力も含めてだ。しかし逆に、訓練を続けたが故に他の面に比べてなかなか開発されない能力やなかなか修正されない欠点や弱点も浮き彫りにされてくる。私は、後者の、浮き彫りにされた、なかなか修正されない一人ひとりの欠点と弱点にふりまわされていた。

昔は確かに、追い込み過ぎや要求し過ぎで選手をパニックに陥れてしまっていたことが少なくなかった。しかし、コーチ暦二〇年を過ぎた今、そんなことで選手をつぶしてしまうようなバカげたことはない。追及するにも、今は一段階ずつだ。それが今、二段階目から三段階目へ移ろうとするぐらいのところではパタッと頭打ちなのである。

二月十九日。松井は完全に復調したと見た。練習の中で鋭いドライブインを一発決めた。たったそれだけのことだったが、それを見てもう大丈夫だと思った。この日のメモに私は次のように書いている。

『コーチは顕微鏡を視る科学者と同じだ。練習の始めから終わりまで、根気よく観察しなければならぬ。顕微鏡の中では、ちょっと目を離れた隙に大変化が起こっているかもしれない』

それは、自分自身に言い聞かせたつもりだった。松井が復調し、チームには活気が出てきてもいいはずなのに、その見通しが立たない。目につくのは個人個人の欠点ばかり。

「何かを見落している。何かを……」

「何かきっかけはないか……」

そこで、自分の指導法をもう一度整理してみた。

情報の整理

情報の伝達

ア 量

イ 時期

ウ 方法

評価・修正

コーチが選手に何かを教える場合、この三点を明確にすることだ。自分のやり方に欠陥はないか、それとも選手の能力の限界なのか、そんなことばかり考える日が続いた。

三月十一日。月川のシュートフォームを矯正した。リリースの時に手の甲がくつき過ぎる。それを離させた。それだけで距離が伸びた。こうして、個人個人の技術についてはなんとかうまくはなっていくところが、チーム力としてはそれが実らないのである。

『情報のイメージ化』

『連続した事象の中での読み取り』

その能力をなんとか開発しようと思っただけでメンタルマネジメントを試みてみたが、その効果もサッパリ。その間を利用して居眠りしているのではないかと皮肉っぽく考えたくもなる。

### 三流コーチ

自分が思っていることをたくさん喋った。

自分が見つけた誤りをたくさん指摘した。

それは、多くのことを知っているという自分、多くのことが見えるという自分を確認して自己満足しているに過ぎない。それは、一流コーチがやることではない。私はそう思っている。

ある日、私はマネージャーに言った。

「今日から、俺が練習を止めて話をしたり、プレイのやり直しをさせたりする時は、その時間をストッププウオッチで計れ。そして、それが一分以上だったら知らせる」

練習は、長くても三時間である。その中で、三分の給水休息が五回あるとする、中断して話をするのが合計十五分あったとして、それに、メニューによっては一〇分で三回しか順番がまわってこないものもあるし……と考えていくと、正味が二時間にも満たない練習になる。

マネージャーにタイムを計らせると私も時間を気にする。その結果、話をできるだけ手短かにわかりやすく切り上げようとする。また、一回気になることが起きてもそこではことをなげかけておくだけにして、それが二〜三回重なるとうまく止める、というようになった。タイムを計らせて何よりもよかったのは、『念押し』や『つい』がなくなったことだ。小言を言っているとシャクにさわって、ずっと前のできごとを持ち出してウダウダと文句を言ったり、「いいか、もついちと言っぞ」「などと何回

も同じことを喋ったりする。選手にとって一番いやなのはそれだ。それがなくなったのは非常に良かった。それに、「あと一―二回待ってみよう」と思ってたがまんしていると、選手の中にもそれに気付いているのがいて、プレイの切れ目にちょっと話しあったり注意したりして解決するケースが出てくるようになった。これは重要な意味を持つ。

「待て！」と言ってプレイを止め、私が注意したことは選手にとっては『先生から教えられたこと』だが、こうして自分たちで気づいて確認したり注意しあったりしたことは、『自分達のもの』である。そうしてみると、ちょっと辛抱して待ってやれば自分達で気がついて治すことができたのを、私がしゃしゃり出ていくとどくとどくと嘔みついてたことがずいぶんあったことだろう。

さらに工夫した。練習中に注意するのは特定の個人だけでよく、他の選手には関係のないものもある。そんなことは、順番待ちの時間や、全体の流れを止めなくてよい場合に、本人だけを呼んで注意するようになった。

まだある。それは、スクリーメージをやっていて、月川がポストへのパスをたて続けにカットされた時だった。私は審判をしているマネージャーにタイムアウトを請求した。すると、選手達がサツと集まってこようとしたから、「アキ以外は来なくていい」と言って追い返した。みんなは、私が月川と話をしているのを見ていて、同じミスを何度もしたのできつと怒られているんだと思っていた。確かに昔はこんな時はまちがいに怒った。しかし、月川に私が話したことは次の作戦だった。

「あいつらはきつとまたパスカットを狙ってくるから、今度はパスするふりをしてドリブルで抜け」これは私と月川だけしか知らない作戦である。たとえ失敗に終わってもよかった。月川が次の解決策を知って、堂々と落ち着いてコートに戻ることであればそれで充分なのである。後に何回もこのやり方で成功したことがあるが、「やったぜ！」という感じでコート上の選手と目が合うのはなんとも気持ちがいいものだ。他人は誰も知らない、ふたりだけの秘密作戦だったというのがまた喜びを倍加させる。

いい時ばかりではない。練習がうまくいかなくて私が怒りまくっている日もある。そんな時はマネージャーも苦しい。一分を超過したら知らせると言っているけれど、カンカンに怒っている私には報告しづらいためである。練習がうまくいって、私が怒っていない時にマネージャーに聞いてみた。

「おまえ、時間をこまかすことがあるだろ？」

「はい、一分三〇秒を越えたら報告しますけど、それ以内だったら報告しないことがあります」

案の定だ。私が怒っている時は自分は悪くないのに、ものすごく気の毒そうな顔をして私に時間を告げる。きつと、そんな時は一〇秒や二〇秒オーバーしても報告しないのだろう。私も悪い。いつもはマネージャーが報告すると「ウン」と言っとうなずくののに、怒っている時は返事もしないでブスツとしたままである。選手にとって、監督は絶対の存在だし怖いから不平を言わずに黙ってついてくるが、そんなわがままをずいぶん選手に押しつけてきたんだろう。マネージャーの内田が優秀なマネージャーだっただけに、いつそう強くそれを感じた。

## フアンミー

五年前、Kという若い先生がやって来た。陸上競技が専門の熱心な若者だった。彼は、翌年公立高校の採用試験を受けることになっていたので一年契約の非常勤講師だった。一年契約なので次の年は鶴鳴に勤めているかどうかわからないのに、毎日グラウンドに出て熱心に陸上部員の指導をしていた。なかなか熱心な勉強家なので、私も彼のことを気に入ってよく話をし、メシを食いに行った。

ある日、彼が私に相談を持ちかけてきた。

「公立の試験を受けずにこのままここにおいてもらおうと思っんですが」

理由は、公立高校に採用されてもそこが陸上競技の指導をできる環境じゃないかもしれない。鶴鳴はそれができる。そして、私といっしょにいるという勉強できる。自分は、いわゆる学校体育の教師としてではなく、陸上競技のコーチとして世に出たいというのである。鶴鳴は体育教師の欠員があったし、本人にその気さえあればすぐ採用できた。彼もそれを知っていたのでそう言ったのであるが私は即座に反対した。

彼はいつも私のそばにいた。彼も私を気に入っていた。私からいろんなことを吸収しようとしていた。彼のものの言い方ややっていることが、時々私に「アレっ？」と思わせた。私に似ているのである。私はそれが気に入らなかった。

「だめだよそれは、おまえがここにいる間、俺の二番煎じばかりやって、永久に俺を越すことはできない。俺は、俺の影を引きずっていかないKという独自の指導者を見たいし、どんなに慕われてもファミリーをつくる気などかけらもないからね」

私はそう言った。

彼は翌年、公立高校の採用試験に合格した。しかし、案の定赴任地が 農業高校というところになり、陸上競技の指導ができるどころか、毎日生徒指導上の問題でふり回され、そればかりかバレーボール部の監督を命ぜられてすっかりくさりきっていた。二年目ぐらいまで「公立高校を辞めるから鶴鳴で採用してくださいよ」が彼の口ぐせだった。

そこを三年勤めあげ、対馬の最西端の高校に転勤となり、今ではどうやら陸上競技の指導ができる環境になりつつある。彼が鶴鳴に残りたいと言った時、勉強仲間が増えるのだからそれは私にとっても都合のいいはなしで、「残れよ」と言っつのが普通かもしれないが、ファミリーをつくるといずれ自分もつぶれると信じ込んでいる私は、そう言えなかった。

長い間指導者をやっているとすばらしい選手に出会う。というより、三年間ですばらしい人間に成長していく選手がいる。そんな選手に出会った時はいつも、卒業させるのがもつたない気持ちになる。そんな経験を何年も積み重ねてきて、最近私はある考えを持つようになった。それは、指導者は孤独と仲良しにならなければならぬという考えである。指導者というものの性格を冷静に見つめてみた。自分を含めて今まで関わってきた多くの指導者達を一人ひとり思い浮かべながら。

非常にわがままである。

排他的である。

独占欲が強い。

これが指導者特有の性格である。そういう性格というより、指導者をやっているとだんだんそういう性格になっていくのかもしれない。が、これは指導者に共通した性格だと思う。それが高じて、私自身多くの失敗をしたし、周囲の者が迷惑している例をたくさん見たことがある。

指導者としての経験年数が増えてくると習いに来る若いコーチが増える。それを重ねていくと、自分を奉る者だけかわいがり、奉らない者の悪口を言うようになる。実業団や大学に行った卒業生が帰省する。第一番にあいさつに来なかったら「あのやろう、恩を忘れやがって」と思う。こんなことは数え上げればきりがない。

こうなると、その指導者は選手や他の若者のために自分の力を貸してやっているのではなく、自分を大切にしてもらいたいから周囲の者を束縛している人間でしかない。もつそれは指導者ではない。独裁

者である。三年間苦楽を共にして卒業していく選手達は、それぞれがそれぞれの人生をよりよく生きていくために、三年間の生活を参考にして次の段階へと通過していく一人人であって、その後本人がいつまでも高校時代を懐かしもうが、すっぱり忘れてしまおうがそれは本人の都合である。それによって人物を評価されるべきではない。

恩とか感謝というものは、相手を感じるものであって自分から強要するものではない。それを確かめたくて、孤独に耐えられなくて、多くの者をいつまでも自分に関わらせようとする指導者は、いずれ自分で掘った墓穴に自分で葬られることになる。

## 一年後

屈辱の船出から一年が過ぎ、再び高校総体がやってきた。

松井は大丈夫だが、清水は装具をつけて出場できるようになったものの、実力の半分ぐらいしか活躍できない状態であった。スターティングメンバーは、月川（G二年生）・松井（G三年生）・森保（F三年生）・秋田（C三年生）・峰（F三年生）、控えに山道（F二年生）ただひとり、あとは戦力にならない。

決勝リーグに残るだろうと予想された、純心・長崎北・鶴鳴・向陽の四校は順当に決勝リーグに残った。春までの段階で実力のランクをつければ、ダントツの純心、次いで長崎北、鶴鳴、向陽の順だろうと予想された。私は、三チームを相手に次のような作戦を立てた。

向陽高校とはいつも練習試合をやり、だいたいいつも勝ってたので作戦は立てなかった。長崎北にはゾーンプレスで攪乱する作戦を立てた。純心にはまともではとても歯が立たないのでポイントガードとセンターを密着して守り、フォワードのふたりはマークしないで捨てる作戦を立てた。それでも勝ち目は無かったが、少しあわててくれればいいなと思った。

初戦の長崎北にはゾーンプレスでピタリうまくいった。それで決勝リーグ一日目が終了。最終日は二試合。最初が向陽。しかし、その試合はただ消化するだけ、決勝の純心戦でどれだけ試合ができるかだけが私の頭の中を占領していた。

しかしそれは甘かった。向陽は監督も選手も積極的だった。常に後手後手にまわる鶴鳴はなかなか引き離せない。そして後半、峰が五反則退場したのと同時に同点に追いつかれた。しかも、同点のまま迎えたタイムアップ直前、焦った選手たちは残り六秒でファウル。フリースローを決められればほぼ負けが決定する。万事休す。が、緊張した向陽はフリースローを失敗。リバウンドボールを得た鶴鳴は速効を出し、森保がレイアップを決めて辛うじて首の皮一枚で命が繋がった。

決勝は鶴鳴のあがきも前半で終わった。完全に空けられた純心のフォワードが前半こそ戸惑っていたが後半に入ると落ち着いてシュートを決めた。そうなるともう打つ手はない。後半はだまっただけだった。それにしても、矢張り絶対の相手をあわてさせることすらできないとはつきりわかっている試合を、じっと二〇分間も耐えて見なければならぬとはなんともつらいことか。「よかったよかった、よくがんばった」応援に来た関係者や先生達がみんなの肩をたたいてそう言う。

しかし、コートに立ってみると、そんな慰めのことばはかえってみじめさを倍加させる。勝負にたずさわる者は、途中で勝負が見えてしまう試合は絶対にしないことだ。